
けいおん ~奏でる物語~

桜 みずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん～奏でる物語～

【Zコード】

Z8756Y

【作者名】

桜 みずき

【あらすじ】

朱智遼

は自分の姿にコンプレックスを持つている。尖端恐怖症で伸びっぱなしになりながらも、しつかり手入れをしている長髪と持ち前の童顔ちびっ子なので女の子と間違えられる事がある遼は軽音部の部長に半ば強引に軽音部に入れられてしまう。

そこで巻き起こる軽音楽の物語。気まぐれに突つ走ります！

プロローグ！（前書き）

始めての方、始めて！

お久しぶりの方、お久しぶりです！

さて、『けいおん～奏でる物語～』が始まるよ～

みんな一緒に「せえのー！」でアーリーハッピーフルーツ

せえのー！

『Now Thank you!』

ちょー！それEHDでしょー！ー！

しかも、否定されたしー！

ちなみに何て言えば良かったんだろ～

では、本編をお楽しみ下さいー！

プロローグ！

「…………」

血壓に田覚まし時計のアラームが鳴り響く。

俺は重たい瞼を開けようと頑張りながら手探りでうなこ音を消そうと奮闘する。

「……あ……何処だっけ……？」

しかし、田覚まし時計にいつまで経っても触る事が出来ない。

いつもと同じ場所に置いているので、いつもと同じ場所に手を伸ばせばアラームを消せるのにもかかわらず、今日は田覚まし時計に触れる事ができなかつた。

俺はこのままじやつむといので、しうがなくベッドから顔を上げ、枕元を見る。

「あれ？」

やはり、枕元には田覚まし時計がなかつた。ベッドの下を見てやると田覚まし時計が転がつていた。

俺はアラームを消すと、ベッドから降りて血壓を出る。

リビングに向かうと朝ご飯がテーブルの上に並べられていて、キッチンでは力チャ力チャと音を立てながら皿洗いをしている同居人

がいた。

「おはよっ、奈亮」

俺は同居人、水河 奈亮に挨拶をした。

「お、起きた？ 遼もおはよっ」

「うん。おはよっ」

俺達は2LDKの『広い』に分類される家賃7万円のマンションに住んでいる。とは言つてもまだ一週間だけだけど…。本当は俺一人で住むことになつていたが、訳があつて奈亮と一緒に住むことになつた。

まあ、自慢じゃないけど、俺の親は結構な金持ちだつたりするので、毎月12万円の仕送りがある。家賃も奈亮と半分ずつ払つているので実質家賃3万5千という格安だ。

奈亮は皿洗いが終わつたらしく手を拭いてリビングに顔を出す。

「いよいよ今日だな」

不意に奈亮が言った。

「今日から高校生かあ…」

だけど意味はわかつた。今日は俺達が入る高校の入学式。

それが俺達の入る高校の名前だ。去年までは『私立桜ヶ丘女子高等学校』だったが、今年度から共学校になつた。理由は良くなは分からぬが、巷では「少子化の問題ではないか」と言われている。

「男子何人いると思う?」

俺は奈亮に聞いてみた。

「さあ? わつかんね」

俺達は席に座り、朝食を取る事にした。

卵焼きに、塩鰯、そしてみそ汁に白いご飯……毎回思つてば、100点の朝食だ。奈亮の料理の腕は本当に凄い。夕食もかなり手間がかかるてるのを作つてくれる。しかも、料理以外の家事も全般やつてのけるものだから、将来は良い主夫になりそうだ。

卵焼きを半分に割つてみると、中は程よく半熟、さらにはチーズも入つていた。

その卵焼きを口にいれる。卵焼きが口の中どろけ、一瞬にして味が口いっぱいに広がる。

「ああ～…もう、成仏していい…」

「お~お~、大袈裟過ぎだ。それに、そこで使つ表現として正しいのは、『昇華していい』だら。成仏じゃもう死んでるや~」

奈亮がツッコんでくれた。どうやらシラクワの腕も多少有るようだ。

そんなやり取りをしながら、20分弱奈亮が作った朝食を堪能した。

・・・・・

朝食を終え、自室に戻り桜高の制服を着た。深い紺色のブレザーに学年色の青のネクタイに紺色のズボン。それを身に纏つた俺は姿見に映る自分を見た。

「…………似合わなっ！」

あまりの似合わなさにこいつ叫んでしまった。しかし、似合わない原因は自分の顔にある事は分かっているのでしょうかがないことだ。

髪を切る事を躊躇いながら3年間も伸ばし、腰辺りまで届くようなしつかり手入れのしてあるサラサラな髪。男とは思えない可愛らしい顔。男とは到底思えない線の細い体つきに小さい背。誰がどう見ても男装をしている女子だ。

「はあ……」

俺は溜息を吐きながらスクールバッグを持ち、自室から出た。

自室を出ると奈亮が待っていた。

「遼も用意出来たか」

「…………」

「どうした？」

「いや、何でもない……」

奈亮は普通に桜高の制服を着こなしていた。元々背が高く、見た目も人目を引くほどのかつゝよさがある。髪もワックスをかけてい るらしく、かなり決まっている。横を歩くのを躊躇したくなる程のイケメンになっていた。

「やつぱり奈亮ってかっこいいな

俺は少し悪意を込めて言つた。ただ単に奈亮がかっこよく見えるから嫉妬をしているだけだが……。

「やつか？おれは遼が女だつたら良いな～って思つこと結構あるわ。 可愛いし。私服姿なんてまんま女の子にしか見えないし

「なつ……俺は男だ！可愛いとか言われても全然嬉しくねえよ／＼／＼！」

「はつー…そんな顔赤くしちゃつて、本当は嬉しくんじゃねえの？..」

「おっえ…B」とかやめろよ…。気持ち悪い

「やつか？遼とだつたら花があつて良いこと思つた？..」

「奈亮…。それ本気で言つてんなり病院行つてこー

「んじゃ学校行く前に病院行くか

「マジで本気で言つてたのー?」

「あはははー、嘘だよ嘘ー、めり、時間無から行くぞ」

「あ、うん」

俺達は新しい生活の第一歩を踏み出しつづけた。

「うめ」

奈亮が何故か玄関で躊躇った。

「空気を読んで欲しいね。まつたく……！」

「何故俺はキレられた？」

「自分の胸に聞いてみろ」

何はともあれ新しい生活の第一歩は踏み出せたから良しとしますか。奈亮は異様に小さく一步だつたけど…。

プロローグ！（後書き）

次回から原作キャラが出ます！

楽しみにしていて下さい！

ちなみに1週間に1回のペースで更新していきたいと思います！

第一話『入学!』（前書き）

一日連続の投稿！

ふう……期末テストが終わったから気楽にいけて良いですよ～

ああ～…センター試験だるい…

では、本編をお楽しみ下さい！

第一話『入学!』

「入試の時にも思つたけど、やっぱ桜高つてテカイな…」

まだ肌寒さを残す4月の上旬ちょい過ぎ。私立桜ヶ丘高等学校の校門で、目の前に広がる桜高を眺めながら俺は正直な感想を述べた。

「だな。廊下もフローリングだつたし、校舎の中もかなり広かつたしな。さすが私立つて感じだ」

隣にいる奈亮も同意し、俺に繋げて評価の感想を述べた。

「まあ、こんなところで立ち止まってたら入る人の迷惑になるから、敷地内に入ろうか」

「ああ。そうだな」

俺達は桜高の敷地に入ろうと足を動かそうとした瞬間、左から声が聞こえてきた。

「そこの人達どいてえーーー！」

左を向いてみると猪突猛進の如く駆け抜けて来る一人の女子生徒がいた。

奈亮は軽やかに避けたが、俺は反応速度が遅かつたせいでその女子生徒に轢かれてしまった。

「あいた！」

「…つて！」

女子生徒とその場に倒れ、俺は背中を強打し、手に持っていたスクールバッグも少し離れた場所に落としてしまった。

「つてえなー…。おい、大丈夫か？」

俺は背中が痛くて仕方ない体を起き上がらせ、ぶつかってきた女子生徒の心配をする。避けられなかつた俺が悪いしね。

「あわわわ…！だ、大丈夫です！す、すみませんでした！！」

女子生徒に怪我はなく大丈夫だつたらしく、少し焦りながらも、しつかりと頭を下げる謝つてくれた。

「いや、そんな謝んなくていいよ。俺にも落ち度はあつたから

「何でもいいが、遼達の周りにギャラリーが出来ることを忘れんな

「唯^{ゆい}…何やつてんのよ…」

「「えつー!?」

奈亮の発言により少し焦り、周りを見渡して見ると十数人の生徒に囲まれていた。心なしか、大半の生徒は女子で、男子は四、五人しかいなかつた。

そして、目の前にいる女子生徒は顔を真つ赤にして「本当にすみ

ませんでした……」と言ひてメガネをかけた女子生徒と共に桜高へ入つて行つた。

「散々な田に遭つたな

「うさ。ていうか、背中めっちゃ痛え」

「はい

俺は背中の痛みを訴えると、奈亮が手を差し出してくれた。その手を掴み、やつとの事で立ち上がる事が出来た。

「なつ……」

「遼? ビツレた?

立ち上がり髪を整えようとしたら、髪の毛が背中の半ばから腰辺りまでずたずたになつていた。という事は……。

「そんな……」

「そつか。遼は尖端恐怖症だからハサミを自分で切られるのが怖いんだつたな

「爪楊枝だつて生まれてこの方使つたことねえよー。血廻じ無いけどなー」

「さうだな。血廻にならないな

「こしてもビツレつて。こんなこなんつたんじや、もつビツレつてうむねだよ……」

俺は自分の髪を見ていると、田頭が熱くなっていた。

「じゃあ、とりあえず髪を結つてみたらどうだ？それで多少は『まかせる』

仕方なく奈亮の案で妥協した。

近くに転がっていたスクールバッグを取り、バッグの中からゴムを取り出し、それで後ろ髪を纏めた。

「どう？」

「うん？ダメだな。これだけ髪が自由の利く縛り方じゃダメだ」

「じゃあ、どうしようと？」

「ポニーテール」

「は？」

「ポニーテールにすれば良いこと思つ」

「出来る訳ねえだろ！恥ずかしいわっ！」

何を言って出すかと思えば……。前から言つてますが俺は男です。そんな女々しい野郎じゃありません！

「でも、そんなどたずたの髪を晒し回すよつね良こと思つ」

「確かに…」

「それにお前なら可愛いし似合つて無いだけビ…」

「だ・か・ら・可愛・いとか言われても全然嬉しくねえよ…」

だが、確かに奈亮の言つ通りなので、俺は渋々髪をポーテールに結うこととした。

髪を少しづつかき上げていき、髪を縛りポーテールにした。

「どう?」

「バツチリ似合つてるー。」

「似合つてると似合つて無いかを聞いたんじゃねえよー髪は不自然じゃないかを聞いたんだよー！」

「いめんじめん。大丈夫だよ。跳ねてないから気にすんな

「本当?」

ちよつと信じられないのでもた聞いて詰めたが、奈亮は焦った感じでこう言った。

「つて…やっぱーあと、10分もしない内に入学式前のH.R始まるぞー。」

「マジー?」

時計を見てみると八時半を回っていた。

俺達はクラス分けを急いで眺め、同じ三組だったことを喜びながら教室へ向かった。

・・・・・

あの後、H.Rには間に合ひ、入学式も無事に終えた。そして、今は自己紹介と言うだる~い消化任務なのだが、自己紹介に入る前にあつた席決めでちょっと問題があつた。右隣は奈亮で何の問題も無く、嬉しいことだったのだが、左隣が問題だった。

何の因果か知らないが、左隣は今日の朝に俺にぶつかった女子生徒だった。

「私は『平沢 唯』って言います！」

そして今はその彼女の自己紹介の番だ。名前は『平沢 唯』と言う可愛らしい名前で、良く見えてみると結構可愛い子だつたりする。

「好きなことは家で『ひらり』することです！」（キリッ！）

そして、性格が残念だった。

「（なんだかや顔で言われても…）」

「そ、そう。とってもユニークな趣味をしてるのね…。」

先生も呆れながらそう言った。

「えへへ～。そうですか？」

それなのに平沢さんは褒められてると勘違いして、照れていた。

「それじゃあ次、朱智君。あけちお願いね」

遂に俺にも順番が回ってきた。何故か急に緊張してきたが、俺は立ち上がり勇気を振り絞って声を出した。

「俺は『朱智 遼』です。ここには先週引っ越してきたばかりなので、地元の事を良く知りません。なので、皆さんにいろいろとご迷惑をおかけする事があると思いますが、精一杯頑張りますので、どうかよろしくお願ひします」

しつかり言えた。と、自己紹介の余韻に浸ろうと思つたら隣の平沢から拍手が聞こえてきた。そして、その拍手が何故か教室中に広がつた。恥ずかしさのあまり平沢にチョップをお見舞いした。

「あいた！」

「自己紹介だバー」

俺は小声で平沢に言った。

「遼ちゃん照れてますな～」

「遼ちゃんとか言つたな。女の子っぽいだらう」と言つた。

平沢の発言はスルーして、変な嫌な呼び方を言つから、やめるよ

うと言つた。

「だつて遼ちゃんは遼ちゃんしかないじゃん」

「朱智君？平沢さん？自己紹介が進まないからひょっとその辺にしておいてくれる？」

平沢が意味不明な事を言つた瞬間、先生に注意され、渋々黙る平沢。

「それじゃあ水河君。お願ひね」

奈亮の番がきた。どんな自己紹介をするのかと思い、ワクワクしながら聞いた。

「俺は『水河 奈亮』って言います。特技は料理です」

という味つけない普通な自己紹介をして席に座った。

それから約20分後にクラス40人全員+担任の自己紹介は終わり、桜高第一日目は終わった。

第一話『入学』（後書き）

唯ちゃんの登場です！

本家よりゆるい唯ちゃんになっちゃった気がしますが、そこは愛嬌でカバーということです…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8756y/>

けいおん ~奏でる物語~

2011年11月27日12時55分発行